[解　題]

ピエール・ブルデューの農民論について

須　田　文　明

ここで紹介する論文[1]の筆者ピエール・ブルデューについては，すでに多くの著書が邦訳されていることもあり，もはや改めて紹介する必要はないであろう。また，この論文そのものについても，訳者自身，詳細に検討したことがある[2]。この論文の題名および副題に比べて，書かれた内容の方は，農民の「ヨメ不足」という，きわめて具体的なものである。そのために，表題と内容とのギャップに驚きを感じるかもしれない読者のために，あらかじめ表題について説明しておきたい。「禁じられた再生産」というのは，農民の未婚状態が，農家が次世代にわたって経営を維持していくことを困難にする，という事態を示している（したがって，集団としてみた場合，農民自身が再生産されないことになる）。また，娘が農民と結婚しないこと，あるいは，農家の若者自身の離農について，他の職業との所得格差や雇用機会と関連づけた，農業の低収益性の結果として論じられるのが常であるが，こうした経済的次元における，都市的世界への「吸引力」が働くのは，象徴的な次元を通じてである，というのが，副題の意味である。

ところで，すでにわが国においては，農家の「ヨメ不足」，それと関連した「外国人花ヨメ」といった話題が，一時期センセーショナルに取り上げられていた。農民の独身問題の深刻さ，という点では，フランスでも同様である。例えば，1989 年 8 月 23 日付けの「ル・モンド」紙に，アルプス南西部，ドローム県の，人口 100 人ほどの三つの小村に，マダガスカルから 1 名，フィリピンから 2 名の外国人妻がやってきたという記事がある。一つの例を見てみよう。リュシアンは 44 歳，ジゴール村の農民である。パリにある結婚紹介会社に以前から登録していた。最初は「フランス人女性を選んでいた」が，「フランス人女性たちは，『よい条件』を求めており，彼が，自分は農民だ，と書いてやると，もう返事がこなくなった」という。そこで，マダガスカルのヨランドという小学校教師との 2 年半に及ぶ文通が始まることになる。彼女には前夫との間に 10 歳の息子がいるが，子供ともども，この村にやってきた。現在，夫は 18 頭の乳牛，羊の世話をし，ヨランドは，菜園，ウサギ，鶏の世話をしている。この新聞記事だけからは即断することはできないが，こうした現象は，「花ヨメの売買」といった形で取り上げられるというよりも，小さな村がコスモポリットになって行く，という意味で肯定的に捉えられているのが興味深い。例えば,フィリピンからは 2 名の外国人妻がやってきたと書いたが，二人目のフィリピン人女性は，一人目の女性の友人であり，彼女が隣村の独身男性を紹介したのが縁で結婚することになったという。

さて，ここに紹介するブルデューの論文は，1962 年に同じく『農村研究』誌に掲載された記念碑的論文，「独身と農民の条件」と対をなしている（“Célibat et condition paysan”）。89 年の論文でも指摘されているように，62 年の論文では，すでに後のブルデュー社会学を導くことになる様々な観点が端緒的にではあれ垣間みえる。例えばハビトゥスという概念がここでも言及されている。しかしこれと関連して興味深いのは，農民と身体の関係について，一つの項目として論じられていることである。つまり，ある社会関係ないし規範の個人による内面化を考えようとす

る場合，われわれは，これを精神的な過程とみなしがちである。それに対しブルデューは，これを身体化として捉えたのである。彼の説明に耳を傾けよう。クリスマスのダンス・パーティーは，潜在的配偶者としての男女の出合いの典型的な機会なのであるが，農民は，地方に特徴的なダンスにしか合わせられず，都会風のダンスを前にしてぎこちない態度をとってしまうのである。つまり，独身農民が自らの存在条件について抱く知覚は，身体的行動と適合しており，結局のところ，この存在条件を実現するように行為することになるのである。

翻訳という形で紹介する以上，本論文の内容について詳細に論じることは避けるが，社会学的な争点の一つに言及しておくことは無用ではなかろう。つまり，この論文において，結婚市場という概念が，中心的なテーマとして現れながらも，曖昧な形で用いられているという印象を受ける。つまり，ここでは，それは何らかの財が他の財と交換されるというような，一般化された交換として理解されているのであるが，ディマッジオ等によれば，むしろ結婚市場という概念は，二人の潜在的配偶者同士が，文化的類似性に基づいて親密さを求める際の，組み合わせとして理解されるべきであるという[3]。

ここで，ブルデューによる，フランスの農村・農民研究について一言触れておきたい。ブルデュー自身の農民についての記述は，彼の多くの著作の中に散見されるが，農民論としてまとまったものとしては，上述の二つの論文の他に，「分類対象＝階級対象としての農民」[4]がある。以下，この論文を一瞥しておこう。もちろん，ブルデューの農民論と言っても，彼の社会哲学と分けて論じる訳には行かないので，少々迂遠ではあるが，後者についても触れざるを得ない。

まず，ブルデューにとっては，社会的世界とは，意志や表象としてある。換言すれば，ある社会集団が，そのようにあり，あるいはそのように行為するのは，自らが抱く，あるいは他の諸集団が抱く表象のためなのである。ところで，こうした表象は所与のものの反映ではなく，「構成」の行為の所産である。こうして社会的現実の社会的構成は，無数の相対立する構成行為において実現される。そして，行為者は自らの利益に適した社会的世界の表象を押しつけるために，闘争しつつ，この構成を行うのである。社会的世界の表象を生産するにあたって，各行為者はその生産手段が異なり，したがって闘争は不平等なものとなる，という。

こうして，社会についてのブルジョワ的な表象が支配的なものとなる。世界についてのブルジョワ的な表象は，客観化された形式の下で，自然界や社会に対する理解の規範を押しつけるのである。このように，社会的なるものの自然化，つまり社会的に構成された現象が，あたかも自然に発生した当然の現象であるかのように思われる事態が促進されることになる。ところで，支配的な集団が自身の知覚の基準を押しつけ，自分が自分について考えるように社会に対し知覚させることができるのは，彼らが，客観化の作業に直接貢献する人々（画家や作家，ジャーナリストなど）に対する権力を持ち，自分の客観化とイメージの生産とを管理できるからである。ブルデューは，ここに芸術作品の社会的機能を見る。つまり，それが提供すべきとされているものは，社会的世界について，中立的に喚起すること，そしてこの喚起は，あたかもそれが社会について語っていないかのように語ることなのである。

それに対し，社会的世界についての自分のイメージ，したがって自分の社会的アイデンティティの生産に至るまで支配された被支配的集団は，語るのではなく，語られるのである。こうした集団の中でも，農民は，分類対象（クラス・オブジェ）＝階級対象の顕著な例をなしてい

る。つまり農民は，その定義からして，矛盾に満ちた期待の対象となっており，彼をめぐってなされる対立した言説の中でしか存在し得ない。イデオロギー生産界の様々な領域が，農民に全く矛盾した彼のイメージを提示するのである。例えば，農民の徳や農村の美点をたたえる言説は，労働者や都会の欠点を語る際の婉曲的な表現となっているのである（ここにおいては，社会的カテゴリーと倫理的カテゴリーとが，紋切り形のかたちで同一化されている）(5)。ところが，事情がより複雑なのが，ブルデューの指摘するフォルクロア化という現象である。例えば方言について考えてみよう。一方で，経済・婚姻・学歴といった市場は，暗黙のうちに，農民に方言の放棄を要求するが，他方で，特定の知識人分派は方言への回帰を要求している。この場合彼らは，（他の支配的諸集団との区別立てという意味で）ディスタンクシオン戦略を行使し，そこから生じる差異的利益に与ることができるが，こうした知識人の試みも支配の分業体制に組み込まれざるを得ない。つまりこうした戦略は，必然的に農民を，都会人のための風景へと変形された自然の管理人にしてしまい，農民的なるものを博物館へと追いやってしまうことになるからである。

以上が，「分類対象＝階級対象としての農民」という論文の要点である。しかし残念ながら，これだけでは，自己を定義する権力を奪われた階級が，いかにして自らを種別的な階級として，相対的に自律的なアイデンティティを持った集団として考えることができるのか，こうした論点については曖昧なままである。このような困難な課題を初めとして，ブルデューの弟子たちは，農村・農民研究の分野で，すでに多くの研究を蓄積している(6)。しかしこれらの研究についての検討は，残念ながら別の機会にゆずらざるを得ない。

最後になったが，ご多忙を極めるなか，ブルデュー氏からの翻訳の許可を仲介して下さり，また，テキスト中の多くの疑問点について快くご教示頂いた，加藤晴久教授（東京大学教養学部）に感謝したい。（本研究は，平成6年度科学技術庁重点基礎研究「農村における高齢者への医療介護支援システムの普及と需要に関する研究」の一環としてなされたものである。）

注(1) "Reproduction interdite-La dimension symbolique de la domination économique-", *Etudes Rurales*, No. 113 - 114 , 1989 .

(2) 拙稿「結婚市場と農民 ── P．ブルデューの所説に寄せて ──」，『農業総合研究』第 48 巻第 3 号，1994 。

(3) DiMaggio, P., Mohr, J. "Cultural Capital, Educational Attainment, and Marital Selection", *American Journal of Sociology*, Vol. 90 , No. 6 , 1985 . p. 1254 .

(4) "Une classe-objet:la paysannerie", *Actes de la recherche en sciences sociales*" No. 17 - 18 , 1977 , pp. 4 - 5 . [classe-objet]というのは，訳しにくいタームであるが，[classe-sujet 階級主体]というマルクス主義理論の中心的テーマを踏まえているのであろう。

(5) 階級闘争の痕跡を抹消するために，真の国民的・文化的アイデンティティの担い手として，農民が称揚される際の仕方については，さしあたり以下を参照せよ。E.バリバール（拙訳）「人種主義と国民主義」（E.バリバール・I.ウォーラスティン著，若森章孝監訳『人種・階級・国民（仮題）』大村書店 1995 ）。これに対し，同じく被支配的な階級でありながら，労働者は，その「人種的構成」や「文化的アイデンティティ」がいちばん怪しげな階級とされるのである。このような理由のために，農民の社会的定義をめぐる闘争が，政治に対し特権的な場を提供するのである。

(6) S.マレスカは，農民の「公式的なイメージ」が産出されるのは，農民・農村をめぐるジャーナリストの期待と，農民指導者による，模範的な農業者像を体現したいという関心との，これら二つの行為者の共同作業によるところが大きいという。ところが，農業ジャーナリストも，象徴的な利益をめぐって，イメージ市場で他のジャーナリストたちと闘争してい

るのである。残念ながら，ジャーナリズムのヒエラルキーの中で彼らの占める位置は，政治経済全般，文化等を扱うジャーナリストに比して，決して高いものではない，という。S.Maresca, "La représentation de la paysannerie", *Actes de la recherche en sciences sociales*, No. 38, 1981.

〔付　記〕

この解題を書き終えた後に，ブルデュー派の社会学者と、H.マンドゥラースやM.ジョリヴェ等の「農村社会研究者（リュラリスト）」との間で激しいやりとりがあったことを知った。ことのおこりは，INRA（国立農業研究所）の研究者である，C.グリニョンとF.ウェーバーが，H.マンドゥラースやM.ジョリヴェを中心とした，1945年以来の，CNRS（国立科学研究所）のCES（社会学研究センター）における農村研究のあり方を批判したことである(C. Grignon, F.Weber, "Sociologie et ruralisme, ou les sequelles d' une mauvaise rencontre", *Cahiers d' économie et sociologie rurales*, No. 29, 1993)。

彼らによれば，正しい専門化（当該学問の運動と進歩によって引き起こされたそれ）と素朴な専門化（政治的行動のために外部から課されたそれ）とを区別する必要があるという。また，ジョリヴェら「農村研究集団」の研究はモノグラフィー研究を中心としており，非常に異なった地域研究の単なる寄せ集めに終始し，現代世界への農民世界の適応，というテーマしか持っていない，という。外部で生まれた問題への農村社会学への統合が意味するのは，素材における理論的な考慮が，同時に，行政的な考慮でもあることである。彼らは，ジョリヴェらの編著になる著書『農村から環境へ』(Du Rural à l' Envionnement, L' Harmattan, 1989)を取り上げて，農村問題（農業省に援助された）から環境問題（閣外大臣省等により援助された）への移行が，それを物語っている，と揶揄している。つまりお気に召すままの社会学は安直な社会学であり，このような社会学は社会学の自律的要求の一般的水準を下げてしまった，という。こうして，彼らは，農村研究集団と社会学との出合は社会学にとって不幸であった，と結論する。

これに対するジョリヴェの，Cahiers 編集長宛の手紙は，「安直な社会学という表現に個人的に不快感をおぼえた。INRAのラベルのもとにこのような表現が活字となっているのに驚いた」というものであった（同誌no. 32，1994)。グリニョンらの論文が，それだけでフランス農村社会学史の批判的検討となっているのに対し，ジョリヴェの手紙は残念ながら，学問的な反論という形はとっていない。

こうしたやりとりについて，筆者自身はコメントする能力を持ち合わせていない。ブルデューの農村研究は，「規則から戦略へ」というパラダイム転換をもたらしたといえるだろうが，それならば，マンドゥラースたちのそれは，どのような理論的貢献をおこなったのであろうか。農村研究集団の「ライフヒストリー」を詳細に後づけていた故田原音和氏が(「現代フランス農村社会学の潮流 ── 一研究集団の発展史をたどりつつ ── 」，村落社会研究会『村落社会研究　第13集』お茶の水書房，1977)，晩年には精力的にブルデュー社会学を紹介されていたということが示唆的ではないであろうか。ブルデューのもとで学んだ若い社会学者たちが，フランスの農村研究を活気づけていると思われるが，わが国においてこうした若い世代の農村研究者が育っているかどうかを考えてみるのも無益ではないかもしれない。